

小学生における関係性攻撃経験が対人関係に及ぼす影響

姜 信善・大重 絵美里*

(2005年 8 月 31 日受理)

The Effect of Relational Aggression for Peer Relations in Elementary School

Sinsun KANG and Emiri OHSHIGE

キーワード：関係性攻撃，対人関係，加害経験，被害経験，小学生

Keywords : relational aggression, peer relations, assailant experience, injured experience, elementary school children

問 題

「関係性攻撃 (relational aggression)」は、Crick & Grotpeter (1995) により命名され、「仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動」と定義されている。具体的攻撃行動には、敵対している子どもをグループから締め出すために無視をするよう呼びかけたり、悪い噂を流したりすることが挙げられる。つまり、関係性攻撃は敵対する子どもへ直接的に叩く、蹴る、言語的に脅かす等の攻撃をするのではなく、仲間関係へ働きかけることにより、間接的に危害を加える攻撃行動であるといえる。

関係性攻撃は上述のように仲間関係を操作した攻撃であるため、一見、関係性攻撃を示す子どもは仲間関係を成立させ、その関係を操作できるほど仲間とうまく関わっているように見えるかもしれない。しかし先行研究では、関係性攻撃を示す子どもの社会的適応や、仲間関係について様々な問題が報告されている。例えば、Crick, N.R. (1997) は、関係性攻撃児は身体的攻撃児の場合と同様に、衝動的であるため他者とよく言い争いをする、悪いことをしても罪悪感がないといった外面化問題 (externalizing in nature) を抱えていること、また、関係性攻撃児は身体的攻撃児とは異なり、高い心理的不安や低い自尊心を抱くといった内面化問題 (internalizing in nature) を抱えていることを見出している。さらに、Crick & Grotpeter (1995) は、関係性攻撃児は男女共に抑うつ感が高いこと、特に女兒においては孤独感が高く、仲間からの受容感が低いことを報告している。

ところが、関係性攻撃を示す子どもの仲間関係についての研究では、関係性攻撃を示す幼児や児童ほど仲間から拒否されている (Crick & Grotpeter, 1995; Crick, Casas, & Mosher, 1997) こと、関係性攻撃児の仲間集団内での関係は親密的であるが同時に排他的であり、

関係性攻撃はグループ外の子どもではなく、グループ内の子どもに向けて行われること (Grotpeter & Crick, 1996) が示唆されている。一方、関係性攻撃の被害を受けた児童は、他の児童に比べ、仲間から拒否されたり、学校適応に問題を抱えたりすることが多く、抑うつ、不安、孤独感といった内的問題を持ちやすいことなどが示されている (Boulton & Smith, 1994; Crick & Grotpeter, 1996)。

以上のように、関係性攻撃を示す側、関係性攻撃の対象とされる側が適応上の問題を抱えていることが示される中で、関係性攻撃が対人関係へ様々な影響を及ぼすことが予想される。すなわち、関係性攻撃の生起する仲間集団は親密性と排他性が同時に高いという特性を示すことから、そのような特性を持つ集団の中で関係性攻撃を経験した場合、仲間関係に不安を抱き、その不安を解消するため、できるだけ自分と気の合う仲間と関わり、仲間の意見や態度に従った行動をとろうとすることが考えられる。また、関係性攻撃という仲間関係のネガティブな操作は、攻撃対象児の気がつかないところで起こる場合が多い。それ故、関係性攻撃を経験することにより、仲間同士がお互いのことをどう思っているのか、仲間から自分がどのように思われているのかを意識するようになるといった対人関係への影響が考えられる。しかし、先述のように、先行研究では関係性攻撃を示す子どもの特性や対象とされる子どもの特性についての研究が多く、関係性攻撃の加害、被害経験、また、関係性攻撃の複数の立場での経験による対人関係への影響についての検討はほとんど行われていない。

そこで本研究ではこれらのことを考慮に入れ、小学生を対象に関係性攻撃の加害・被害の経験が対人関係に及ぼす影響について検討する。

ところが、Crick, N. R. (1997) は関係性攻撃の定義の中で、「相手に危害を加えることを意図した」として

* 富山大学大学院教育学研究科

いるが、実際の子どもの関係の中では相手に危害を加えることを意図していなくても仲間関係が操作され、関係性攻撃が起こり得ると考えられる。例えば、三島(1997)は「関係を利用した攻撃」の進行を、A児・B児・C児からなるインフォーマル集団を例えにして、関係性攻撃の生起メカニズムについて次のように記述している。すなわち、B児の「約束を破る」、「A児とC児に対して命令するような口調で話す」などの「問題行動」がA児とC児の間で次々に話題になるにつれ、A児とC児は、自分がもつ不満の原因はB児の「問題行動」にあるのだという暗黙の合意を得る。そして、「B児の良くないところを改めさせる」という目的を持ち、B児に対して「にらむ・無視をする」という「関係を利用した攻撃行動」が開始される(三島, 1997)というように説明している。

このように、相手に危害を加えることを意図していなくても、自分の不満の解消としての「悪口を言う」という行動が仲間関係を操作し、悪口の対象となった子どもが無視されたり、傷つけられたりする可能性が考えられる。従って、本研究では関係性攻撃を「仲間関係を操作することによって相手に危害を加えようと意図する、しなないに関わらず、仲間関係が操作され、相手に危害が加わる可能性のある攻撃行動」として捉えることとする。

また、三島(1997)は「関係を利用した攻撃行動」では、対象となる子どもが集団内で順々に変わっていると述べている。対象となる子どもが順々に変わっていくということは、1人の子どものみが加害と被害の両方の立場を経験する可能性が高いことが考えられる。このように関係性攻撃の加害、被害の両方の経験の有無を考慮した場合、関係性攻撃を加害と被害の両方の立場から経験した子どもは仲間関係のネガティブな操作を様々な立場から経験したことから、加害、被害のどちらかを経験した子どもや経験のない子どもよりも対人関係への影響が強いというように、関係性攻撃経験別にそれぞれ異なる対人関係への影響が考えられる。しかし、従来の関係性攻撃に関する研究は関係性攻撃を示す側と関係性攻撃の対象とされる側とを切り離して考えており、関係性攻撃の加害、被害の両方の経験の有無についての検討はほとんど見当たらない。

そこで本研究では、関係性攻撃経験については次のように分類し、より具体的に検討していく。関係性攻撃経験において、「あの子を無視しよう」などと言った経験は能動的経験という加害経験として、言われる対象になった被害経験は被経験としてみなすことはもちろん、聞かされた経験は受身的経験という加害経験としてみなすこととする。聞かされた経験を加害経験のひとつとしてみなすことについては、関係性攻撃を行うには操作の対象となる仲間関係、つまり、聞かされる存在が必要であり、聞かされた子どもは操作されることにより悪口を言ったり無視をしたりするなど、受身的ではあるが攻撃行動に関与する可能性が考えられることからである。よって、

関係性攻撃の加害経験については能動的か受身的かをさらに分類したうえで、子どもの関係性攻撃の能動的経験、受身的経験、被経験や、関係性攻撃の複数の立場での経験が対人関係に及ぼす影響についてより具体的に検討する。

以上のことを考慮した上での本研究の仮説は次の通りである。

仮説1. 全ての関係性攻撃経験をした子どもは仲間関係のネガティブな操作を様々な立場から経験したことにより、関係性攻撃のある一部の立場を経験した子どもや経験のない子どもよりも、仲間からの自分や他の仲間に対する評価をより強く意識しているであろう。

仮説2. 全ての関係性攻撃経験をした子どもは、関係性攻撃の生起や進行の過程を様々な立場から体験したことから、関係性攻撃をより身近に感じ、仲間から排斥されないよう、気の合う仲間の意見や態度に従った行動をとることをより望むであろう。

以上の仮説を検討するための本研究の具体的目的は、以下の通りである。

- (1) 関係性攻撃の加害・被害経験による対人関係への影響を測定するための尺度を作成する。
- (2) (1)で作成された尺度を用い、関係性攻撃の能動的経験、受身的経験、被経験、複数の立場を経験したことにより、対人関係への影響がどのように異なるのかを調べる。

方 法

予備調査

1. 調査対象者 T県内の大学生286名
2. 調査時期 2004年6月下旬～7月中旬
3. 調査内容 小学生の関係性攻撃経験による対人関係の影響を調べるための予備調査として大学生を対象に調査を行った。

1) 関係性攻撃経験についての質問項目

大学生を対象に小学生の頃の関係性攻撃経験を調査するため、小学生の時、友達に他の友達の悪い噂や、「仲間はずれにしよう」というようなことを(1)「言ったことがある」、(2)「聞かされたことがある」、(3)「対象とされたことがある」の3項目を設けて、どれにあてはまるのか、あてはまるもの全てに○をつけるよう求めた。

2) 関係性攻撃経験による対人関係への影響についての質問項目

先の質問で回答してもらった、(1)～(3)のそれぞれの経験に対する、対人関係への影響について、自由記述で回答を求めた。具体的には、1)の質問で答えられた経験が、それからの友人関係にどのような影響を及ぼしたかについて、自由記述で回答を求めた。

4. 調査手続き 調査は、調査者の教示により集団形式で実施された。回答所要時間は約15分であった。
5. 調査結果 収集された自由記述の回答を分類した結果、関係性攻撃経験による対人関係への影響について、「人との関係性を重視するもの」に関して12項目、「友人を選んでつきあうもの」に関して6項目、「他者の思っている事や言動を気にするもの」に関して5項目、「人とうちとけることができないもの」に関して5項目の、計28項目が関係性攻撃経験による対人関係への影響測定項目として見出された。

本調査

1. 調査対象児 T県内の公立小学校3校の5年生と6年生それぞれ7クラス、合計365名のうち、性別、学年不明児4名を除いた361名を分析対象とした。
2. 調査時期 2004年12月中旬
3. 調査内容

1) 関係性攻撃経験及び関係性攻撃経験群の分類

被験児に、友達から他の友達についての「悪いうわさ」や、「知らんぷりをしよう」などと(1)『自分が言ったことがある』、(2)『友達から他の友達のことを聞かされたことがある』、(3)『自分の「悪いうわさ」などを言われたことがある』、(4)『どれもあてはまらない』の4項目を設けて、どれにあてはまるのか、あてはまるもの全てに○をつけるよう回答を求め、関係性攻撃経験を調べた。

まず、関係性攻撃経験の分類については、関係性攻撃の加害経験、被経験に分類した。さらに、加害経験は、自ら関係性攻撃を行った経験か、他者からの働きかけによる経験かによって、それぞれ能動的経験、受身的経験に分類し、経験の組み合わせによって以下の通りの分類が行われた。

- ①能動的経験群：この群は、(1)にのみ○をつけた群である。つまり、自ら関係性攻撃に関与したとみなし、能動的経験群と称する。
- ②受身的経験群：この群は、(2)にのみ○をつけた群

である。つまり、受身的ではあるが関係性攻撃に関与した可能性が考えられ、受身的経験群と称する。

- ③被経験群：この群は、(3)にのみ○をつけた群である。つまり、能動的にも受身的にも関係性攻撃に関与したことがなく、攻撃対象となった可能性がある群である。
- ④能動・受身的経験群：この群は、(1)、(2)にそれぞれ○をつけた群である。つまり、自ら攻撃し、かつ、受身的に関係性攻撃に関与した可能性が考えられる群である。
- ⑤能動・被経験群：この群は、(1)、(3)にそれぞれ○をつけた群である。つまり、自ら攻撃し、かつ、攻撃対象になった可能性がある群である。
- ⑥受身・被経験群：この群は、(2)、(3)にそれぞれ○をつけた群である。つまり、受身的に関係性攻撃に関与し、かつ、攻撃対象になった可能性が考えられる群である。
- ⑦全経験群：この群は、(1)、(2)、(3)の3つ全てに○をつけた群である。つまり、能動的に、受身的に関係性攻撃に関与し、かつ、攻撃対象となった可能性が考えられる群である。
- ⑧経験なし群：この群は、(4)にのみ○をつけた群である。つまり、関係性攻撃の加害、被害経験のない群である。

ただし、①能動的経験群、③被経験群、⑤能動・被経験群は、被験者の数が不十分であったため、分析対象から除外された。関係性攻撃経験群の分類基準及び群別の人数(%)の内訳をTable 1に示す。

2) 関係性攻撃経験による対人関係への影響の測定

予備調査によって作成された関係性攻撃経験による対人関係への影響についての28項目を用いた。これらの28項目に対して、小学生に関係性攻撃経験からどのように思うようになったのか、経験なし群に対しては、いつもどのように思っているのかを「全くそう思う」(5点)～「全くそう思わない」(1点)までの5件法で

Table 1 関係性攻撃経験の分類基準と群別の人数の内訳

群 名	関係性攻撃経験			人数[名]	割合[%]
	加害経験		被害経験		
	能動的経験	受身的経験	被経験		
能動的経験群	有り	無し	無し	13	4(4)
受身的経験群	無し	有り	無し	97	27(31)
被経験群	無し	無し	有り	13	4(4)
能動・受身的経験群	有り	有り	無し	58	16(18)
能動・被経験群	有り	無し	有り	5	1(2)
受身・被経験群	無し	有り	有り	51	14(16)
全経験群	有り	有り	有り	78	21(25)
計				315	87(100)
経験無し群	無し	無し	無し	46	13
合計				361	100

注1) ()内は関係性攻撃経験児315名を分母とした割合 [%] である。

求め、影響が大きいほど高得点となるように得点化された。

4. 調査手続き 調査は、被験校3校のうち、2校(5年生、6年生それぞれ6クラスずつ)は各クラスの担任教師の教示により、1校(5年生、6年生それぞれ1クラスずつ)は調査者の教示により集団形式で実施された。回答所要時間は約25分であった。なお、クラス担任の教示による場合、調査者と同様の教示を行うよう指示された。

結 果

1. 関係性攻撃経験による対人関係への影響について

関係性攻撃経験が、対人関係に及ぼす影響を調べるため、予備調査の結果をもとに作成された対人関係への影響測定項目合計28項目の回答に対し、関係性攻撃経験のある児童(全被験児361名中、315名)を対象に、因子分析

を行った。その結果、固有値の減衰状態などから、5因子構造を仮定することができた。因子負荷量が.30に満たない3項目を削除し、因子負荷量がマイナスに高い項目を逆転項目として設定し直した後、残りの25項目について再度因子分析を行った。バリマックス回転後の因子構造をTable 2に示す。第1因子は“人の悪口は言わない”“だれにでも同じように接する”などの項目からなり、「関係重視」因子と命名した。第2因子は“自分と友達との仲が良いと思うことができない”“心から信頼できる友達ができない”などの項目からなり、「不信・拒否」因子と命名した。第3因子は“友達の言うことや行動から、友達がどう思っているのかが気になる”“友達が自分のことをどのように思っているのかが気になる”などの項目からなり、「他者懸念」因子と命名した。第4因子は“仲の良い友達だけでグループを作る”“いつも決まった人と遊んだり行動したりする”などの項目からなり、「関係枠づけ」因子と命名した。第5因子は

Table 2 関係性攻撃経験による対人関係への影響に関する項目の因子分析結果(バリマックス回転後)

No	項 目 内 容	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
4	人の悪口は言わない。	.757	.088	.024	-.109	.097	.603
2	だれにでも同じように接する。	.688	-.062	.006	-.028	-.226	.529
6	人を傷つけることはしない。	.676	-.075	.075	-.053	.053	.475
1	だれとでも仲良くする。	.653	-.141	.080	.040	-.220	.502
7	自分がきらいな人がいても、友達もきらいになるようにしない。	.635	-.109	.077	-.244	-.077	.427
9	うわさだけで「この人はこういう人だ」と決めつけない。	.610	-.105	.050	-.242	-.110	.457
11	「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言われても、その通りにしない。	.600	.033	-.024	-.407	-.066	.532
3	友達の大切さを考える。	.533	-.159	.204	.101	-.067	.366
5	自分のきらいな人でも、きらいだとわかるようにしない。	.527	-.081	.010	.005	-.231	.337
8	友達に言われた通りに行動するのではなく、自分で考えて行動する。	.422	-.252	.235	-.246	.142	.378
27	自分と友達との仲が良いと思うことができない。	-.136	.783	.011	.084	.071	.644
24	心から信頼できる友達ができない。	-.064	.603	.107	-.024	.003	.379
26	人と接するのがこわい。	-.081	.556	.075	.113	.193	.371
28	グループで行動するのがいやだ。	-.136	.554	-.035	-.200	.259	.434
25	友達に本音を言うことができない。	-.024	.489	.154	-.086	-.018	.271
19	友達の言うことや行動から、友達がどう思っているのかが気になる。	.109	.102	.820	.060	.008	.698
21	友達が自分のことをどのように思っているのかが気になる。	.159	.108	.793	.067	-.091	.679
20	友達が他の友道をどのように思っているのかが気になる。	.041	.143	.688	-.011	-.059	.499
14	仲の良い友達だけでグループを作る。	-.287	-.102	.081	.517	.203	.408
13	いつも決まった人と遊んだり行動したりする。	-.112	.031	.049	.471	.161	.264
12*	「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言われても、それを気にしない。	-.446	-.004	.018	.459	.020	.410
23	みんなとちがうことはしない。	.182	.143	-.006	.427	-.037	.237
16	「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言われる子とは話したり遊んだりしない。	-.322	.101	-.029	.222	.550	.467
17	「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言う子とは話したり遊んだりしない。	.013	.161	-.064	.045	.533	.316
15	きらいな子とは話したり遊んだりしない。	-.441	.084	-.087	.251	.510	.533
因子負荷固有値		5.443	2.365	1.600	1.050	0.758	
因子寄与率(累積寄与率)		21.8	9.5	6.4	4.2	3.0	(44.9)
(α係数)		(.86)	(.75)	(.82)	(.55)	(.65)	(α=.586)

*は逆転項目

『悪いわさ』や『知らんぷりをしよう』と言う子とは話したり遊んだりしない”“嫌いな子とは話したり遊んだりしない”などの項目からなり、「選択的拒否」因子と命名した。

各因子の α 係数は、第1因子、第2因子、第3因子、第4因子、第5因子の順に、 $\alpha = 0.86, 0.75, 0.82, 0.55, 0.65$ であった。

2. 関係性攻撃経験による対人関係への影響の差について

関係性攻撃経験が対人関係にどのような影響を及ぼしているのかを検討するために、関係性攻撃経験群と性を独立変数、関係性攻撃経験による対人関係への影響尺度得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。分析結果を、Table 3に示す。分散分析の結果が有意である場合、下位検定として、LSD法(有意水準5%)による多重比較を行った。

その結果、「関係重視」因子においては、群の主効果($F(4,280) = 2.164, p < .10$)が有意傾向となり、性の主効果($F(1,280) = 23.718, p < .001$)においては有意であった。下位検定の結果、受身的経験群は能動・受身的経験群、受身・被経験群よりも高い傾向が示された($Mse = 40.074, p < .05$)。また、女子は男子よりも得点が有意に高かった。「他者懸念」因子においても、群の主効果($F(4,280) = 2.240, p < .10$)が有意傾向となり、性の主効果($F(1,280) = 22.940, p < .001$)においては有意であった。下位検定の結果、全経験群は受身的経験群、能動・受身的経験群、経験なし群よりも高い傾向が示された($Mse = 6.543, p < 0.5$)。また、女子は男子よりも得点が有意に高かった。「関係枠づけ」因子においては、群の主効果($F(4,280) = 2.088, p < .10$)が有意傾向となり、下位検定の結果、全経験群は受身・被経験群を除いた他の3つの群よりも高い傾向が示された($Mse = 7.442, p < .05$)。「選択的拒否」因子においては、性の主効果($F(1,280) = 18.804, p < .001$)のみ有意となり、下位検定の結果、男子は女子よりも得点が有意に高かった。

考 察

1. 関係性攻撃経験による対人関係への影響について

関係性攻撃経験による対人関係への影響についての因子分析の結果、「関係重視」、「不信・拒否」、「他者懸念」、「関係枠づけ」、「選択的拒否」の5因子構造であることが示された。各因子に高い負荷量を示す項目への回答傾向から、関係性攻撃経験による対人関係への影響については、次のようなことが示唆された。すなわち、関係性攻撃という仲間関係のネガティブな操作を経験していながらも、「関係重視」が示されたことにより、人との関係を重視し、良い関係を築くことは大切だとする態度がうかがえる。しかし、「不信・拒否」、「他者懸念」、「関係

枠づけ」、「選択的拒否」が示されたことから、関係性攻撃は仲間を通して間接的に与えられる攻撃であることを考えたとき、このような経験は仲間との関係に対して疑いや不安、拒否感を感じさせ、対人関係を否定的に捉えやすくさせるのではないかと考えられる。

2. 関係性攻撃経験による対人関係への影響の差について

「関係重視」因子においては有意傾向に過ぎなかったが、受身的経験群が能動・受身的経験群、受身・被経験群よりも高かった。これは、受身的経験群は関係性攻撃に直接的に関与したことがないことから、比較的第三者的立場になりやすく、自ら関係性攻撃を行う者の不当性や攻撃の対象とされる者の辛さに触れることが多かったのではないかと予想され、このような経験により、人の悪口は言わないようにする、誰とでも仲良くするといった関係の維持を重視しようとする気持ちが反映されたものによると推察される。「他者懸念」因子においては有意傾向に過ぎなかったが、全経験群が、受身・被経験群を除いた3つの群よりも高かった。これは、仮説1の「全ての関係性攻撃経験をした子どもは仲間関係のネガティブな操作を様々な立場から経験したことにより、関係性攻撃のある一部を経験した子どもや経験のない子どもよりも、仲間からの自分や他の仲間に対する評価をより強く意識しているであろう」をある程度支持するものとみなされる。これは、全経験群は仲間関係の操作を全ての立場から経験することにより、攻撃する側というある一方の立場や経験のない子どもよりも、仲間関係の操作の前提となる仲間同士の感情や意識をより敏感に察知し、仲間関係の変化を感じとろうとすることによるものと考えられる。「関係枠づけ」因子においても有意傾向に過ぎなかったが、全経験群が受身的経験群、経験なし群よりも高かった。これも、仮説2の「全ての関係性攻撃経験をした子どもは、関係性攻撃の生起や進行の過程を様々な立場から体験したことから、関係性攻撃をより身近に感じ、仲間から排斥されないよう、気の合う仲間の意見や態度に従った行動をとることをより望むであろう」をある程度支持するものとみなされる。これは、全経験群は受身的経験群や経験なし群よりも、自ら関係性攻撃をする、関係性攻撃の対象とされるといった仲間関係の操作を加害と被害の両方の立場から直接的に経験しており、関係性攻撃の一連の過程を体験することにより、関係性攻撃をより身近に感じ、意識していることが推察される。それ故、全経験群は仲間関係に対する疑いや不安をより強く感じ、それらを解消するために、気の合う仲間の意図や行動に従うことにより関係を維持しようとしていることによるものと解釈される。

一方、性差についてみると、「関係重視」、「他者懸念」因子においては、女子が男子よりも得点が高く、「選択的拒否」因子においては、男子が女子よりも得点

Table 3 関係性攻撃経験及び性による、対人関係への影響の平均とSD及び分散分析の結果

		性	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
第1因子 関係重視	受身的経験群	男	36.421(6.123)	38	F(1,280)=23.718*** F(4,280)=2.164†	ns	男<女 能動・受身的経験群, 受身・被経験群<受身的経験群
		女	39.327(5.110)	52			
		全体	38.100(5.712)	90			
	能動・受身的経験群	男	32.750(7.770)	24			
		女	37.100(5.962)	30			
		全体	35.167(7.100)	54			
	受身・被経験群	男	32.609(6.287)	23			
		女	38.308(5.767)	26			
		全体	35.633(6.610)	49			
	全経験群	男	35.382(6.500)	34			
		女	36.795(6.779)	39			
		全体	36.137(6.642)	73			
	経験なし群	男	35.724(7.025)	29			
		女	40.917(4.680)	12			
		全体	37.244(6.804)	41			
第2因子 不信・拒否	受身的経験群	男	10.902(3.839)	41	ns	ns	
		女	10.731(3.385)	52			
		全体	10.807(3.573)	93			
	能動・受身的経験群	男	9.154(3.082)	26			
		女	10.969(3.533)	32			
		全体	10.155(3.433)	58			
	受身・被経験群	男	11.478(4.591)	23			
		女	11.852(4.655)	27			
		全体	11.680(4.582)	50			
	全経験群	男	10.314(3.385)	35			
		女	11.476(4.273)	42			
		全体	10.948(3.913)	77			
	経験なし群	男	11.156(2.886)	32			
		女	10.250(4.495)	12			
		全体	10.909(3.368)	44			
第3因子 他者懸念	受身的経験群	男	10.381(3.223)	42	F(1,280)=22.904*** F(4,280)=2.240†	ns	男<女 経験なし群, 能動・受身的経験群, 受身的経験群<全経験群
		女	11.796(1.937)	54			
		全体	11.177(2.660)	96			
	能動・受身的経験群	男	9.539(2.657)	26			
		女	12.438(1.645)	32			
		全体	11.138(2.585)	58			
	受身・被経験群	男	11.261(2.545)	23			
		女	11.593(2.846)	27			
		全体	11.440(2.689)	50			
	全経験群	男	11.743(2.973)	35			
		女	12.634(2.508)	41			
		全体	12.224(2.750)	76			
	経験なし群	男	10.424(2.862)	33			
		女	12.250(2.527)	12			
		全体	10.911(2.867)	45			
第4因子 関係枠づけ	受身的経験群	男	11.975(2.567)	40	F(4,280)=2.088†	ns	経験なし群, 受身的経験群<全経験群
		女	11.922(2.448)	51			
		全体	11.945(2.487)	91			
	能動・受身的経験群	男	12.192(3.137)	26			
		女	12.781(2.612)	32			
		全体	12.517(2.849)	58			
	受身・被経験群	男	13.409(2.423)	22			
		女	11.640(2.856)	25			
		全体	12.468(2.781)	47			
	全経験群	男	12.971(2.528)	34			
		女	12.762(3.184)	42			
		全体	12.855(2.892)	76			
	経験なし群	男	11.839(2.382)	31			
		女	11.417(3.059)	12			
		全体	11.721(2.557)	43			
第5因子 選択の拒否	受身的経験群	男	8.381(2.230)	42	F(1,280)=18.804***	ns	女<男
		女	7.192(2.418)	52			
		全体	7.723(2.398)	94			
	能動・受身的経験群	男	8.462(2.437)	26			
		女	7.588(1.749)	32			
		全体	8.035(2.102)	58			
	受身・被経験群	男	8.826(2.229)	23			
		女	6.926(1.517)	27			
		全体	7.800(2.090)	50			
	全経験群	男	8.324(2.266)	34			
		女	7.214(3.033)	42			
		全体	7.711(2.756)	76			
	経験なし群	男	8.400(2.608)	30			
		女	7.917(1.564)	12			
		全体	8.262(2.348)	42			

***p.001, **p<.01, *p<.05, †p<.1.0

が高かった。これらの結果については、性役割に基づいたしつけとの関連が考えられる。すなわち、女子に対しては社会的に望ましいとされる方向へのしつけが行われること（桜井, 1984）、また、自分の意志で物事を決めるなどの「個」の発達には男子に、豊かな対人関係を作り上げる「関係性」の発達は女子に有意な発達の特徴であることが考えられている（杉村, 1998）。そのため、女子の場合は社会的に望ましくあろうとすることから、人との関係を保とうとする、人が他者に抱く感情を気にかけることが身につきやすくなったことに、男子は対人関係においても自分の気の合わない人に対してはそれほど関わろうとしないなど、自分の考えや意志を保とうとするところによるものと推察される。

ところが本研究では、Table 3 に示されたように有意差は見られなかったものの、「他者懸念」因子において、能動・受身的経験群では女子が男子よりも得点が高く、「関係性づけ」、「選択的拒否」因子において、受身・被経験群では男子が女子よりも得点が高い傾向が示唆された。このことについては、さらなる検討により、関係性攻撃経験別による対人関係への影響だけではなく、その経験による性差がみられるといった可能性が考えられ、より明確にすることが必要であろう。

まとめと今後の課題

本研究の結果から、関係性攻撃を全ての立場から経験することや関係性攻撃に直接的に関与した経験は、他者をより強く意識する、多くの人との関係の形成をより難しくするといった望ましくない影響を与えていることが明らかになった。ところが、関係性攻撃へ受身的にのみ関与した経験は、対人関係において人との良い関係を保とうとするといったポジティブな影響を与えているという一側面も示唆された。

本研究では、関係性攻撃と対人関係との関連を検討することにおいて、主に関係性攻撃経験を取り上げ、対人関係に及ぼす影響についての検討を行った。ところが、関係性攻撃成立の背景となる関係性攻撃経験児の仲間関係や、関係性攻撃成立後の仲間関係の変化などは考慮に入れなかった。これらのことを具体的に調べることで、より、関係性攻撃と対人関係との関連がより明確にされることが考えられ、今後、さらなる検討が望まれる。

ところが、本研究において Table 1 に示されたように、どのような形態であれ関係性攻撃を経験した子どもは全体の87%を占め、大部分の子どもが関係性攻撃を経験していることが示された。さらに、関係性攻撃経験をした子どもの中で、複数の立場から経験した子ども（能動・受け身的経験群、能動・被経験群、受け身・被経験群、全経験群）が約61%（関係性攻撃経験児315名中、192名）となり、半数以上を占めていることが明らかとなった。これらの結果から、関係性攻撃は多くの子どもが身近に

経験していることが示され、子どもの対人関係の問題と深く関連していることが考えられる。こうした問題への理解や介入のため、関係性攻撃についての様々な側面からの検討が必要であろう。

参考文献

- Crick, N.R. 1997 Engagement in gender normative versus nonnormative forms of aggression : Links to social-psychological adjustment. *Developmental Psychology*, Vol. 33, 610-617.
- Crick, N.R., Casas, J.F., & Mosher, M. 1997 Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, Vol. 33, 579-588
- Crick, N.R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment, *Child Development*, Vol. 66, 710-722.
- Grotpeter, J. K., & Crick, N. R. 1996 Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, Vol. 67, 2328-2338.
- 三島浩路 1997 対人関係能力の低下といじめ 名古屋大学教育学部紀要（心理学）第44巻 3-9
- 桜井茂男 1984 児童用社会的望ましき測定尺度 (SDSC) の形成 教育心理学研究 第32巻 第3号 310-340
- 杉村和美 1998 男性と女性が共に生きること—家族における共生. 岡本裕子・平田道憲・岩重博文（編）, 人間生活学—生活における共生の理念と実践 北大路書房

謝辞

本研究を実施するに当たり、質問実施に快くご承諾くださいました小学校の先生方より、多大なるご配慮とご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、被験者としてご協力をいただきました児童の皆様に深く感謝申し上げます。

